

いつものやりとり Routine

藤田雅史

クリーニング屋から受け取ったワイシャツが、薄い透明の袋を被せられたまま、鴨居に何着もぶらさがっている。一枚をハンガーごとつかんで、袋から取り出す。前立てのボタンホールにホチキスでとめられたタグを引きちぎろうとすると、指先に小さな痛みが走った。ち、と思わず舌打ちが漏れる。

妻がいたとき、ワイシャツは毎朝、常に洋服ダンスの中にきれいに整列していた。ボタンをひとつだけ外せば、すぐに袖に腕を通せる状態で。ホチキスの芯で指を刺すことなどあり得なかった。

指先に小さく盛り上がった血液を唇でちゅつと吸い、シャツの白い生地を汚さないよう、慎重に袖を通す。ひとつひとつボタンをとめていく時間を煩わしく感じながら、俺はふと曜日を確かめる。水曜：いや、火曜日。週に一度のプラスチックごみの日だ。

腕時計を気にしながら台所に急ぐと、食卓に放置したままの弁当の黒いプラスチックトレイで、昨夜の食べ残しが異臭を放っていた。透明のフタをかぶせ、そのまま半透明のポリ袋へと放る。そのポリ袋の口からも、さらに強烈な腐臭が立ち上っている。もはや分別などと律儀なことをしている余裕はない。清掃車がやってくる八時十五分までに家を出なければならぬ。

ポリ袋の口を結びながら廊下にとって返し、出がけに、玄関脇の和室の襖を細く開け、父の様子を確かめる。介護用ベッドの上で口を半開きにしている父の寝顔やその皮膚の白さは、魚類や爬

虫類に似ているといつも思う。胸にかけられた薄掛けがかすかに上下しているのを認めてから襖を閉め、革靴を履いて玄関を出、錠をかけた。

ごみ集積所にはすでに清掃車が到着していた。不穏な機械音を立てながら、放り込まれるごみ袋を次々押しつぶし、飲み込んでいる。息を切らせて近づくと、若い作業員が無言で軍手をはめた手を伸ばした。俺がポリ袋を渡すと、中身を検分することもなくそのまま清掃車に放り投げる。悪臭がつんと鼻の奥を刺激する。

今まで考えたこともなかったが、清掃車の中には、人間の「生活」の臭いが充満している。生活というのは醜く、薄汚く、そして臭い。俺はそんなことをふと思つて小さく身震いしてから、きびすを返してその場を離れた。駅に向かう線路沿いの一本道を歩き出すと、背後の清掃車もすぐに発車し、あつというまに俺を追い越していった。

朝の時間帯だけ一方通行になる線路脇の市道は、俺の自宅の前から駅までの一本道だ。線路側には、有刺鉄線のついた高いフェンスが延々と続いている。路肩にはそのフェンスと平行に白いラインが引かれ、幅五〇センチほどが歩行者通路となっている。

しかし、わざわざ人ひとり分の肩幅もないその窮屈なエリアを歩く者などいない。皆、道路の中央を自由な速度で勝手に歩き、その合間を縫うように学生の自転車が走り抜ける。

自動車もときどき見かけるが、朝の通勤時はほとんど歩行者の専用道路と化しているため、その速度はすこぶる遅い。付近に住むドライバーの多くは、朝この道路を使わずに、一本向こうの片側二車線の国道を使う。音楽を聴きながら道の真ん中を歩く若者にクラクションを鳴らしているのは、たいてい、よそからこの道に迷い込んできたドライバーだ。

俺は毎朝この道を歩いて駅に向かい、そして夕方、この道を歩いて家に帰る。

二ヶ月前、俺の妻はこの道で車にはねられて死んだ。

日暮れどき、買い物帰りだった。駅のすぐ横のスーパーでいつものように買い物を済ませ、自転車のかごに袋を押し込んでいつものように走り出した妻は、そこから一〇〇メートルほどの、薬局の角の選挙ポスターを掲示している立て看板の前で、いつものように道路を横断しようとしたところ、前方からやってきた高級外車にはねられた。自転車ごと飛ばされ、数メートル先の道路に頭を強く打ち付けた彼女は、その一生を終えた。

車を運転していたのは広告代理店に勤める四〇代後半の会社員だった。警察の調べで、男は営業先へのメールをスマホに打ち込みながらよそ見運転していたことがわかった。ひどい話だが、それをひどいと責めきれないのは、妻もまた、スマホを操作しながら自転車でよろよろ蛇行運転していたと、複数の目撃者が証言しているからだ。

俺は、妻の絶命した場所を毎朝通って出勤している。

薬局と選挙ポスターの立て看板。見知らぬ誰かがそこに花を手向けてくれていたこともあったが、今は日常の風景だけがある。妻が頭から落下したというマンホールの鉄製のふたも、何事もなかったかのように、無表情でただそこにある。

俺もまた、毎日何もなかったかのような顔でその場所を通り過ぎる。迂回しようと考えたこともあったが、なんだかそれも妻の死をいつまでも引きずらないといけないようで、逆に不自然だった。それに、朝は忙しすぎて迂回などしている時間の余裕がそもそもない。

俺が会社で連絡を受け、病院に駆けつけたとき、もう妻は静かにストレッチャーに横たわり、顔に白い布をかぶせられていた。

即死だったと聞かされた。硬いアスファルトの地面を靴底で感じながら歩いた際に、マンホールの鉄の硬さと冷たさを想像するたびに、本当にそうならなによりだ、と俺は思う。できれば痛みを感じる時間もないほど、死んでしまったことさえ気づかないほど（というのはおかしな表現だけれど）、本当に一瞬の出来事であつたらいい。妻は、痛みにひどく弱い人だったから。

あまりに突然のことに、俺は納骨を終えるまで、妻を失った悲しみのようなものが、よくわからなかった。ただ葬儀社や親戚に促されるまま葬式を出し、火葬して、慌ただしく墓を買い、そしていざ妻の不在に直面してみると、今度は悲しみに暮れるどころではないことがわかった。

結婚してから三十年間、俺の妻は専業主婦として生きてきた。俺たちの間に子どもはいない。そのかわり、一日のほとんどをベツドで横になって過ごす俺の父親がいる。この偏屈な九〇歳の老人の世話を、これまでは妻がひとりですべてやってくれていたのだが、それを、今度は俺が引き受けなければならなくなった。

もちろん、食事も用意しなければいけない。風呂も沸かさないといけないし、洗濯も掃除もゴミ出しも公共料金の支払いも全部俺がやらなければならない。

「あんたね、たかが洗濯とか、たかがゴミ出しとか、たかが缶ビールの補充くらいとか、とるに足らないことみたいに平気で言うけど、その小さな一個一個が家のなかにどんだけあると思ってるのよ、山よ、山」

ちよつとした口喧嘩をするたびに、妻はそんな台詞を繰り返していたが（そして俺は聞いてわかったふりを繰り返して過ごしていたが）、確かにそれを自分でこなす段になると、その小さな雑用の数の多さに辟易する。家事をすべて完璧にこなそうとすればそれだけで休日的一天がまるごとつぶれてしまう。

「まあ、それでもそれが私の仕事ですから、いいんですけどね。私なりに効率的にちゃちゃつとやってますからね」

山登りにも、コツつてものがあるんですよ、と妻は言った。家事初心者の俺の場合は、妻の境地までまだずいぶんと遠そうだ。風呂掃除など、妻が死んでからは一度もしていない。毎日、湯を流して栓をして湯を張る、の繰り返しだから、浴槽の内側が湯垢でずいぶんと汚れている。ブラシのようなもので擦り落とすべきなのだろうとは思うものの、そのブラシがどこにあるかわからない。それを探す気力もない。

万事が万事その調子なので、風呂同様に台所の水回りやトイレもずいぶんと薄汚く、常にどこかしら変な臭いがする。そういえば窓もろくに開けていない。飯を食い、風呂に入り、洗濯物を干し、老人のわがままを聞いて世話をするだけで、あつというまに時間がなくなる。

何より、俺には会社がある。定年まで、まだあと四年。仕事ができるだけ早く切り上げて毎日定時に帰るとしても、家事と仕事と介護の三本立てはさすがに無理だ。

家の食事はもっぱら宅配弁当である。

俺ひとりならば外食で済ませればよいのだが、父親はとても外に連れ出せる状態ではないし、放っておくと何も口に入れないまま一日を過ごすこともある。まともに調理できる人間がいないのだから、限られた選択肢のなかでは、もう弁当をとるしかない。昼間通ってもらっているヘルパーさんの勧めで、栄養バランスも味も比較的良好という近所の業者に一食四百円で注文している。

しかし、四百円の弁当は、しょせん四百円の弁当の味しかない。ときどき、無性に妻の手料理の味が懐かしく感じられる。

どうやら伴侶を失う悲しみというのは、夜更けに切れかけた蛍光灯の下で半分呆れかけた老人と食卓につき、テレビのバラエテ

イ番組を無言で眺めながらプラスチックトレイの弁当をつまんで感じる、そういう性質のものらしい。

そのうちこの暮らしに慣れてきてリズムがつかめるようになってきたら、せめて味噌汁くらいは俺が作ろう。夕飯に一度作れば、翌朝もそれをあたためて飲めるし、多めに作って冷蔵庫で冷やせば数日はもつだろう。

ただ、そんなことを思っても、俺はこれまでの人生で味噌汁を作ったことが一度もない。出汁のとり方がわからないし、どんな味噌をどのくらいの分量使えばいいのかも知らない。

「鍋に水いれて昆布落として火にかけて、あと鰹節いれて」

「いや、いいよ、まだそんな余裕ないんだ」

「部長、ちゃんと食べないと死にますよ」

「わかってるよ」

「味噌は味噌ならなんでも大丈夫ですよ。適当にやれば味噌汁になります。味噌なんだから」

お前、味噌汁自分で作ったりするのか、と独身の部下にそれとなく訊ねると、作りますよ、と平然とした答えが返ってきた。

会社の定例会議に集められた社員たちが、続々と会議室に入ってくる。俺たちはいつもと変わらぬ後ろの窓側の席で、時間を気にしながら上役の到着を待っている。

「料理なんて簡単ですって」

「毎日作ってるのか」

「何時までサービス残業させられてると思ってるんすか。土日のどつちかとか、彼女が遊びに来たときとか、まあ、そんなもんすよ。あ、よかったら部長ん家に出張しましょうか。材料費と手間賃はもらいますけど」

「いいよ、お前に頼むと外で食うより高そうだから」

がはっ、と乾いた笑いを会議室に響かせる部下の、その軽薄さととつつきやすさが、今はありがたい。

俺の妻がスマホを操作しながら運転していた男の車にはねられたことを知っているくせに、一緒に営業車に乗ると、助手席に俺が座っているにもかかわらず、隣で堂々とスマホを操作しながら片手運転するような奴だ。

五時からの定例会議が六時に終わり、六時半には会社を出られるはずが、専務だか総務部長だかの都合で開始が一時間ずれこんでいる。今日は七時にヘルパーさんに来てもらい、父の介護について話し合いをもつことになっているのだが、これでは会議が早めに終わったとしても約束の時間には間に合わないだろう。

ヘルパーさんの携帯に何度か電話をかけてみたのだが、なかなかつながらない。いちおう、留守電に帰りが遅れることは吹き込んでおいた。しかし折り返しが無いのは、まだ聞いていないということだろう。

会議室に入ってくる専務の渋りきった表情から、長丁場のミーティングを覚悟しないとイケない雰囲気伝わってくる。俺は背広のポケットからプライベートのスマホをこっそり取り出し、ヘルパーさんにメールを送ることにした。

〈橋本です。今夜はすみません。さきほど留守電に残した件、急で申し訳ありませんが、明日以降に変更してもらえませんか。よろしく願います〉

頭でさつと考えた通りに入力するのに、〈橋本です。〉と打ち込み、「こ」と入れると、入力画面のキーの上に「今夜」「これから」「こつち」などの予測変換が表示される。

最近のスマホは要領がいい。「今夜」を指でタップすると、さらに「遅くなります」と出てくる。なんとなくそれをタップすると、「夕飯は」「いらない」「よろしく」と次々に言葉が提示され、あつという間に文章が出来上がっていった。

〈今夜遅くなります夕飯はいらないよろしく〉

ふん、と思わず鼻から音が漏れた。隣の部下が、なんすか、と

小声で振り向く。いや、なんでもない。

残業のある日、会社から妻にメールを送るときは、いつも同じこの文面を送っていた。一文字を入力するだけで、ほんの数秒で一文が出来上がる。今夜遅くなります夕飯はいらないよろしく。

このスマホは、妻がもうこの世にいないことを知らない。

数年前から会社の営業用に、それまでの二つ折りの携帯電話ではなく、スマートフォンを持たされるようになった。エクセルなどのファイルも開けるし、画像のやりとりも簡単だ。地図やネットを見るときのにも便利なので、自分のプライベートの携帯電話も半年前に同じようなスマホに買い替えた。ちょうど妻もガラケーを機種変更したと言っていたので、一緒に駅前のショップに出向き、揃いのスマホにした。

スマホは学習能力が高く勉強熱心で、ずいぶんと気が利く機械だが、やはり所詮、機械は機械だ。多少気は利いても、気遣いや気配りなどできない。人型ロボットが進化してコミュニケーションが格段に円滑になったとか、いつかはロボットがあらゆる単純労働を担うことになってブルーカラーの多くが職を追われるとか、最近ニュース記事でよく目にするが、おそらくはこのあたりが、知的ロボットの可能性の限界なのではないか。

出来上がった妻用のメールを消してしまうのがふと惜しくなり、俺はそれを下書きとして保存してから、新たにヘルパーさんにメールを作って送り、スマホをしまった。

結局、会議が終わったのは八時過ぎだった。

さっさとデスクまわりの片付けを済ませ、明日にまわせる用件は全部保留にして会社を出て電車を乗り継ぎ、また朝と同じ道を歩いて、家に着いたのは九時。

玄関のドアを開けた瞬間、むわっとした嫌な湿気が身体にまわりついてきた。吸いこんだ空気は生ぬるく、銭湯の脱衣所のそ



れに似ている。俺は、ち、と舌打ちをひとつして急いで革靴を脱ぎ、走つて廊下の突き当たりの風呂場に駆け込んだ。

案の定、風呂の湯が出しっぱなしで、浴槽からあふれ、それが危うく脱衣所を浸水させそうになっていた。

馬鹿野郎。ふざけんよ。

思わず、壁のタイルを手のひらで叩く。こんなこと、妻が死んでからもう四度目だ。それでも、覗き込んだ浴槽の湯の中に父の身体が沈んでいないことに安堵する。

半分呆けた父は、一日のほとんどをベッドの上で過ごしているが、かといつて、ひとりで立つて歩けないというわけではない。ときどき粗相をすることはあっても、いちおうトイレはひとりで済ませられるし、腹が空けば台所までふらふらと歩いて勝手に冷蔵庫を開ける。

「風呂、入ったのか」

「あ」

「風呂、お湯出しつ放しだったぞ」

「ああ、そうか」

「うん」

「そう」

和室の襖越しに話しかけると、短く、嘎れた声が帰ってくる。親父が無事に生きている、会話ができる、そのことに安心すると同時に、まだ生きている、ということに腹の底から怒りのようなものが湧いてくるのも感じる。

夜遅くに会社の仲間と酒を飲んで家に帰ると、ときどき、妻は「私も飲んでいい？」と冷蔵庫から缶ビールを出し、不機嫌な表情を俺に押しつけるようにして、「今日はお義父さんからこんなことを言われた、こんなに大変だった」という話をはじめることがあった。俺は適当な相づちを打つてその会話をさっさと切り上げようとするのだが、そんなとき妻は俺の目をじつと見つめ、「いいわね、あなたは飲んでストレス解消できて」などと皮肉を

言うのだった。

妻の気持ちが、今になってよくわかる。

ああ、早く楽になりたい。

ときどき、俺はそんなふうに思ってしまう。

食卓には宅配の弁当があり、その横に書き置きがあった。

「いらつしやらないようですので、今日は帰ります。携帯を事務所に忘れてしまいました、もしかしてお電話いただいていたらすみません。また明日、改めてご連絡します。吉村」

ヘルパーさんの字は、ペン習字の通信講座のサンプルのように美しく、そのことがこの場にひどくそぐわない。

父のヘルパーは、数人のスタッフのシフトの中から毎日交代で来てくれるのだが、主に担当してくれているこの吉村さんという女性は、しょっちゅう忘れ物をしたり、ものをなくしたりと、割とおつちよこちよいなところがある。ただそれも愛嬌というか、三三歳と比較的若いこともあり、俺はけっこう気に入っている。

あとでもう一度メールして謝っておこう。

そう考えるとき、俺は吉村さんの笑顔を思い浮かべている。いつも着ている社名の入った薄ピンクのポロシャツに透ける下着の線や、その半袖から覗く二の腕のやわらかそうな白い肌を思い出す。どうせ来てくれるなら、むさくるしい男のスタッフよりも、吉村さんがいい。彼女が来ると、家のなかの匂いが変わる。そういつた正直さに、俺はもう罪悪感を持つこともない。妻はもういないのだから。

グラスに水道の水を注ぎ、弁当のプラスチックのフタを開けて割り箸を割る。今夜は弁当の殻をちゃんと片付けてから寝よう。明日は水曜日だから可燃ごみか。そんなことを考えながら弁当の白米に箸を差し込むと、ズボンのポケットでスマホが震え、同時にメールの着信音が鳴った。

おそらくは、夕方のメールを確認した吉村さんからの返信だろう。おつちよこちよいだが、彼女は律儀だ。

少し淡い期待をしながらスマホを取り出し、メールを開くと、驚いたことに、差出人が妻の名になっている。

〈了解しました〉

なにが了解だよ。誰のいたずらかわからないが、ずいぶんとたちが悪い。直前に吉村さんのことを思い浮かべていたばつの悪さも相まって余計に腹立たしい。スマホの電源をオフにしかけると、さらにもう一通メールが届いた。

〈お風呂追い炊きして入ってください。冷蔵庫にビールあります。先に寝ます。おやすみなさい〉

背筋がぶるりと震え、腕に鳥肌が立った。

それは、会社から俺が送るメールに妻がいつも返してきたのと、まったく同じ文面だったからだ。俺は会議室で吉村さんにメールを送る前に、妻に向けたメールを下書きフォルダに保存しておいたことを思い出した。

これではまるで、妻が生きているみたいではないか。

スマホが勝手に過去の着信を転送したのだろうか。そんなことってあるのか。

わけがわからないメールは気持ち悪いが、まあ、機械のやることには間違いもあるだろう、と思い直すと、急にビールが飲みたくなった。

冷蔵庫を開けると、先週買って冷やしておいた発泡酒はすでになくなっていたが、奥に二本、発泡酒ではない本物のビール缶が転がっていた。買った覚えはないから、このビールは生前の妻が入れたままにしていたものだろう。それを意識して手に取ると、

冷たい缶にもぬくもりのようなものを感じてしまうから可笑しい。人間なんて、本当に単純で間抜けな生き物だ。

疲れた頭でぼんやり思い、そして俺はふと気づく。

妻もまた、俺のメールの返信に、「了解」の「り」の字だけ入力して、あとは予測変換のままに文面を作っていたのではないか。「り」↓「了解しました」「お風呂」「追い炊き」「して」「入って」「ください」。

いつものやりとり。俺は「こ」で、あいつは「り」。俺たちはたったの二文字でつながっていた。

テーブルの上のスマホがまたメールの着信を知らせる。

ビール缶を手に戻って開くと、今度は吉村さんからの返信だった。俺はそれにお詫びのメールを返す。

そしてもう一度、さっきの妻からのメールを見ようとするが、しかし、妻のメールはなぜかどこにもない。きれいさっぱり、俺のスマホから消えていた。

なんだったんだらう。天国から送ってきたのか。それとも、やはり疲れがたまって俺の頭がどうかになったのか。まあ、この歳にもなればもう、ちょっとやそつとの不思議など、どうということもない。怖れる必要もなければ、奇妙に思い続けるのも疲れる。

俺はビールを喉に流し込んでから、四百円の弁当をかきこんだ。そういえばさつき冷蔵庫を開けたとき、ビールの手前に味噌のパックがあったような気がする。

明日、部下に味噌汁の作り方をよく聞いてこようか。それともせつかく返信が来るのなら、味噌汁の作り方教えろと天国の妻にメールを試してみるか。いや、吉村さんに味噌汁の作り方を教えてもらうほうが楽しいかもしれない。

缶の底に残ったビールがぬるくて苦い。俺は、妻ともう一度、話がしたいと思った。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。  
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。